
多重人格者の苦悩

寿限無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

多重人格者の苦悩

【Nコード】

N7748S

【作者名】

寿限無

【あらすじ】

デュエルアカデミア・・・そこは多くのデュエリストを輩出する超有名進学校だ。ここには毎年多くの受験生が夢と希望を持って訪れる。橘衛もその一人だった。しかし、試験日当日・・・ここから先は本文をお読みください。

デュエル初心者にもわかりやすいように、をモットーに作ってます。処女作で更新亀ですがお願いします。

前書き（前書き）

なるべく読んでください

前書き

初めに、

- ・処女作です
- ・オリカ、ゲームオリカ使用します
- ・ご都合主義あり？
- ・説明多め
- ・オリキャラあり
- ・作者、オリキャラともに原作知識なし
- ・作者の勘違いによるミスあり
- ・都合上ミスは直さない場合あり
- ・不定期更新
- ・しかも遅筆
- ・キャラの性格改変もあるかも
- ・禁止制限は書いてる途中に決めます

こんな方に見て欲しい

- ・暇な方
 - ・とりあえず見てやるか、といった心の広い方
 - ・ミスを見つけて新人いびりだぜ、ヒヤッハーンな方
 - ・悪口批判を言う方
- どなたでもお願いしたいです↑結論

後悔しても後の祭りです。

拙作ではございますが、評価、感想、誹謗、中傷などございましたら、

気軽にお書き下さると幸いです。

それでは、よろしくお願いします。

キャラ設定（前書き）

・・・ネタバレ？

たまに設定追加します。

すみません、外見なんて思いつかないです。

なんとなくで察してください。

一応がんばってオリキャラは禁書で例えます。

わからない人はgoogle先生に聞いてください。

設定追加 5 / 15

外見は作者が「これだっ！」と来るものがあるまで変更の可能性が
あります。ご了承ください。

外見が確定したら、その時点で外見の横のところに確定と書きます。

5 / 23

キャラ設定

人物設定

- ・各人格の名前
- ・性別 年齢（原作開始時）
詳細

・橘 衛（たちばな まもる）

・性別：男 年齢：15歳

転生しなければ神に殺されたわけでもないふつーのアカデミア受験生。

番号は58とこれまた微妙。だが実技試験の朝に・・・

一人称は「俺」

外見（確定）：黒髪でショート。海原みたいな感じで、ちょっと目がつり気味。雄山じゃないよ。

・ロビン・オークス

・性別：男 年齢：18歳

すごく紳士ぶってる紳士。自称男爵。女性にはすげー優しい。疑問担当その？

一人称は「私」

外見：あの不憫な錬金術師さんを金髪にしてもっと品格を持たせた感じ。

・アイク・シュツトベルト

・性別：男 年齢：24歳

傲岸不遜な男。世界のすべては自分のものと信じて疑わない。疑

問担当その？

一人称は「俺様」

外見：木原くんを黒髪にして、もっと獰猛にする。多分そんな感じ

・ピエール

・性別：男 年齢：？？？

よくわかりづらい人間。仲間内では道化師、ピエロ等と呼ばれている。

唯一偽名を使う。ボケ&説明担当

一人称は「ミー」

外見（確定）：ピエロ。こいつを禁書で例えるのはムリ

・張海燕（チヨウカイエン）

・性別：男 年齢：16歳

ものすごい下っ端臭がする。忠犬みたいな存在。ツッコミ担当

一人称は「オイラ」

外見：アックアさんそのまんま。ギャップ萌え？

・十文字 小夜香（じゅうもんじ さやか）

・性別：女 年齢：15歳

ヒロイン候補。衛と試験会場で隣になった女の子。趣味は機械いじり。

でも、女らしくないと思っているので他人には好きなカードが機械族である、としか言っていない。

一人称は「私」

外見（確定）：絹旗をちょっと大きくした感じ。どこと問われれば、身長とおっp（ry

・嶺開花（リンカイホウ）

・性別：女 年齢：15歳

ヒロイン候補その2。TF5登場キャラ。アイドルデュエリストを目指して勉強中。

元キャラとちよつと違つても勘弁な！因みに今作では多少タカビーの予定（タカビーってもう死語？）

一人称は「アタシ」

外見（確定）：TF5参照

・藤原 雪乃

・性別：女 年齢：15歳

みんな大好きゆきのん。やっぱりです。ただ、ヒロインにするかどうかは未定。

全身から溢れ出すエロスを表現できたらいいな！。

一人称は「ワタシ」

外見（確定）：TF5参照

・????

・性別：???? 年齢：????

まだ秘密（5/15現在）

デュエル設定

・制限についてはカード効果確認のつど表示していく

・シンクロモンスターは存在しない。というか名前も出すつもりはない。・・・タブンネ

・チューナーモンスターはチューナーという表記がない状態で存在つまり、ただの効果モンスター扱い。場合によっては通常モンスター扱い。

詳しくは該当モンスター登場時の説明を見て欲しい。（出るかもわからないが）

・カード効果、処理順は間違つ可能性があるが、間違つた場合でも話の都合上そのままにされる場合がある

・HPは4000、タッグデュエルは行った場合に本編で説明する

キャラ設定（後書き）

いつの間にか閲覧数がすごいことに・・・

皆さん、ありがとうございます。

遅筆ですが、これからも末永くよろしく願います。（5 / 15）

最近、現実で忙しくてなかなか作業が進みません。

何とか今月か来月の頭ぐらいには、と思っています。

待っている方は申し訳ございません。（5 / 23）

第一話（前書き）

連投です

第一話

「ふう・・・」

衛は息を吐いた。

―キンコンカンコン―

「試験終了です。鉛筆を置いてください。」

受験生は試験官の合図と共に一斉に書くことをやめる。
今日はデュエルアカデミアの筆記試験だ。

悪くない、解答を眺めて思った。

「それでは実技試験は明日の9:00開始です。
遅れることの無いように。受験番号は後で送り致します。
解散してください。」

その言葉でまわりが喧騒に包まれる。
皆試験の答えが知りたいのだ。

「ねーこの答えなんだったー?」「私わかんなくて適当に埋めといたー」

やはり今年も難しかったようだ。

「過去問やつといてよかった〜」

そう言って一人呟いていると

「ねえ、君。問27の答えわかる?」

ふと顔をあげると一人の受験生がいた。

「その答えは・・・」

丁寧の説明していく

「あゝなるほど、あちゃー失敗しちゃったかー」

「まあ、そこは応用問題だから解けなくても大丈夫だよ」

「そっかー。ま、基本問題で点数稼いだし、あとは実技か」

「実技の方が配点高いしね。お互いにがんばろう」

そう言つて衛は立ち去ろうとした。

「あ、そくだ！私、『十文字 小夜香』っていうの！小夜香でいーよー」

「俺は『橘 衛』。俺も衛でいいよ。よろしく！」

「うん、よろしく。いやゝ知り合いいなくて困つてたんだわ」

「そりゃみんな一緒じゃね？」

衛の言う通り、デュエルアカデミアは超難関校。

受験生が尻込みするのも無理はないのである。

だから、知り合いがいる確率の方が低いのは当然である。

「それもそーかー」

「んじゃ、今日は疲れたし明日に備えて早く帰った方がいいな」

「そだね。バスで来たの？」

「電車だよ」

「それじゃ帰りは別々か。せつかく仲良くなれたのにな」

「まあ、合格すればいつでも話せるし」

「いよっしゃ、ゼツタイ受かるうぜ！まもっち！」

「まもっち！？・・・ま、いいか。よし、やるぞ！」

「おー、いいねいいね。そのノリで駅までダッシュじゃ！」

「いや、それはムリ」

「まもっち、キミつまんないっていわれない？」
「・・・よく言われる」

なんだかんだで帰宅したときにはすでに受験票が届いていた。
「58番・・・。まあまあか。しかし、届くの早いな」
デュエルアカデミアはどれだけすごいのだろうか・・・。
そんなことを思いながらデッキ調整をして眠りについた。

そして、実技試験の朝1：00に事件は起きた。

「っ！！！！！？？？？」

突然、頭が割れるような痛みが衛を襲った。

「いつつ、なんだ、これは！？」

（なんです？この小汚いところは！）

（俺様にずっとここにいろってか！？冗談じゃない！！）

（ミーにはすごく居心地がいいですがネエ）

（狭い、狭いッス！）

4人の男の声が衛には聞こえた。

「な、誰だ！」

（こちらこそ説明してほしいです！どこですかここは！）

（ああん？誰だデメエら？）

（ヨホホ、愉快的仲間がぽぽぽーん、ですネエ）

（どこも楽しくないッス！）

~~~~~1時間後~~~~~

ようやく落ち着いてきた5人（？）であつた。

「んで、まず一人ずつ自己紹介、そしてどうして俺の中に入ることになったのか説明してくれ」

（わかりました）

（なんで俺様がガキの命令なんざ聞かなくちゃならねんだ！）

（しないと誰もあなたの言うこと聞きませんヨ？）

（オイラは自分の身が安全なら何でもいいツス）

「じゃあ、丁寧語、俺様、ヨホホ、パシリの順な」

（貴族と呼んでもらいたい！）

（偉そうにスンナ、ガキ！）

（どうぞミーのことはピエロと呼んでください）

（パシリってなんスか！）

各々、不満はあるようだ。

「うつせえ！わかった、まずは貴族から！」

（・・・かしこまりました。『ロビン・オークス』と申します。

私は何者かに誘拐されそうになり、犯人ともみ合っている内に崖から落ちて気づいたらここに・・・）

（なんだ、金目当てのバカのせいってことか）

（犯人にとつても、本人にとつても残念な結果ですネエ）

（二人ともそんな言い方はないんじゃないかと思うツスよ）

「次、俺様」

（ちつ・・・、『アイク・シュツツトベルト』だ。とある戦で後ろからやられた。

そしたらいつの間にかここにいた)

(戦・・・戦争ですかね?)

(その場合、味方にやられた可能性がありますネエ)

(まあ、自業自得ツス)

「次、ヨホホ改めピエロ」

(ミーの名前はトップシークレットなので『ピエール』として下サイ。

まあ、ピエロはピエロらしくサーカスの練習でちょっと火の輪くぐりに失敗したら、

狭っ苦しいところに出されたンですヨ)

(ピエロも命がけなのですね・・・)

(プッ、ダッサw道化師ならそれぐらいできろよwww)

(人のこと言えないツスよ)

「ラスト、パシリ」

(なんなんスカ!もう・・・。『張海燕』ツス。バイトの帰りに工事中の建物の倒壊で下敷きツス)

(バイト・・・?)

(変な名前だなオイ。野蛮人共の仲間か?)

(中国の方ですネ。サーカスで一回訪れマシタ)

「よし、オーケー。じゃあ俺の名前な、橘衛だ。寝てたら頭が痛くなってお前らが来た」

(就寝中でしたか)

(残念だったナ)

(子守唄は必要デスカ?)

(怖気が走りそうツス)

とてもうるさく、しかも寝起き。頭が働くわけもなく、

「よし、わかった。まず、寝よう。そして起きてから整理しよう。  
俺受験直前だけど」

(ジユケン・・・?)

(なんだそりゃ?)

(ミーには無用のものですね。)

(いや、まず受験を知らない二人にツツコンでくれッス。『ジョー  
シキ』ッスよ?)

「うるさい！全部あとで考えよう。オヤスミ」

(それでは失礼いたします)

(ふぁゝあ、寝るわ)

(では子守唄ヲ)

(睡眠の邪魔ッス)

問題を先送りにした衛であった。

~~~~~朝7:00 電車内~~~~~

晴れ渡る空の下意気揚々と独り言を呟く少年がいた。

「よし、いい受験日和だ」

（ではそろそろ整理を始めましょう）

（メンドくせえ・・・）

（ミー達の今後のことデスヨ？）

（大事ッス。超重要ッス。優先事項ッス）

~~~~~試験会場近くの駅~~~~~

話し合いがよい具合にまとまったその時、目的の駅に着いたようだ。

（結論だけをまとめよう。

・みんな何故か日本語がわかる。

・生まれた年代がみんなバラバラ。

・多分俺以外みんな死んでる。

・デュエルがわかるのは俺一人。

・考えるだけで頭の中で会話ができる。

・さつきまでは普通にしゃべってた。

・つまり独り言を呟く変な人扱い。

・・・ぎゃー！！！！死にて——！！！！）

（ま、まあ、良くあることですよ。・・・多分）

（うつせーな！静かにできんのか、ガキ！）

（では、鎮魂歌を歌いまシヨウ）

（それオイラ達昇天するッス）

結局、良くわからないのが現状である。

しかし、気にしている暇は衛には無い。なぜなら、

「うわー、もういっぱい来てる」

そう、受験者がすでに大勢いるのだ。  
とはいっても、全体の3分の1にも満たないのだが。

中は広く、席に座り他の受験生の試験が見られるようになって  
らしい。

受験生でこの待遇だ。入学したらどんなものが待っているのだろう  
か。

この時の衛は予想できなかった。

「キミも早く来たのか？」

そう言われ振り向くと、なんというか、こう、地味な少年が立っ  
ていた。

「誰が地味だ!!!」

「いや、俺何も言ってねえし!!」

衛にとっては理不尽に感じただろう。

「いや、スマン。空耳のようだ。俺の名前は『三沢 大地』。受験  
番号1番だ」

「1番!? すっげー。俺は橘衛。衛って呼んでくれ。俺も大地って  
呼ぶから。」

ちなみに番号は58番。それなりの位置にいると自負してるよ」

（なんともまあ・・・）

（ほーう、言うねえ、小僧）

（自負するには微妙ですネエ）

（自信過剰ッス）

うるせー、と返しながら三沢と話をする衛。  
どうやら彼はすべての受験生に声をかけるつもりらしい。

「なんでそんなことするんだよ？」

「俺はいろいろなデッキを持っていてね。」

新しいデッキを作るのにいろいろな人のデュエル理論が知りたいんだよ」

「ふーん、大変そうだな・・・」

話もそこに三沢は他の人のデュエル理論を聞くために離れていった。

そして、

「これより、実技試験を始める！」

試験がはじまった・・・。

と同時に、

「ギリギリセーフですかっ!？」

と小夜香が飛び込んで来た。

「焦らなくても大丈夫だ。今始まったばかりだよ。」

「す、すみません。ありがとうございます」

「落ち着いたら適当な席に座って待っていてくれ。それでは。」

試験官にこう諭され、赤面した小夜香は衛の方に歩いてきて、ちょこんと座った。

「・・・おはよ」

「・・・おはよ」

「・・・ずいぶんとダイナミックな入室だね？」

「・・・バス一本逃しちゃって。しかも次のバスが10分遅れ・・・マジ疲れたわ・・・」

「まあ、間に合ってよかったよ。・・・あ、大地く！」

ふと見上げると三沢がこちらへやってきた。

「どうやら大変だったみたいだな。そちらの人は・・・君の彼女か？衛？」

「昨日初めて会ったんだけど、一目ぼれしたらしいよ？」

「まもっち、華麗にウソつかないの!!!」

コントと自己紹介が終わり、やっぱり三沢は他の人と話に行った。

そして・・・

「受験番号58番！デュエル場まで来なさい！」

衛の番がやってきた。

## 第二話

「出番だ」

「がんばってね〜！」

小夜香の応援を受け、歩き出す。

（他の人がやっていたことをするのですか？）

（しかネエだろ、アホか？）

（ルールはなんとなくわかりましたヨ）

（オイラまだよくわかんないツス）

説明は後でな、衛はそう（心の中で）呟いて、デュエル場に登った。

「よろしくお願いします！」

大きな声でのあいさつは面接などでは基本だ。  
それは実技試験でも変わらない。  
ゆえに試験官も、

「いい挨拶だ。それでは行くぞ！」

「「<sup>デュエル</sup>決闘！！！」」

そういつて勢いよくドローした。

「わたしの先攻だ！ドロー！」

（先、取られましたね）

（さっきから言っただもん勝ちだったぞ）

（いちいちカツコよく叫びますネ）

（各ターン最初にカードを引くんスよね？）

（その通り。ドロー、スタンバイ、メイン、バトル、メイン2、エンド

という順番でゲームが進み、基本的には相手のライフを0にしたら勝ちだよ）

衛が脳内メンバーに説明してる間にもゲームは続く、

「私は神獣王バルバロスを召喚する！」

（神獣王バルバロス）

星8 / 地属性 / 獣戦士族 / 攻3000 / 守1200

このカードはリリースなしで通常召喚する事ができる。

この方法で通常召喚したこのカードの元々の攻撃力は1900になる。

また、このカードはモンスター3体をリリースして召喚する事ができる。

この方法で召喚に成功した時、相手フィールド上に存在するカードを全て破壊する。

「おい、あの教師毎回デッキ違うよな」「対策取られないようにするためじゃない？」

「でもイキナリ最上級モンスターだぜ？」「多分、あのデッキが本気なんじゃ・・・？」

「もしそうなら終わったなアイツ・・・」「カワイソ・・・。ま、相手が一人減る分ラッキー？」

ひどい言いぐさである。

「そしてカードを一枚伏せ、ターンエンド」

（えーと、モンスター、魔法、罠とあるんでしたよね？）  
トラップ

（つーか、攻撃しろよ、チャンスだぞ？）

（先攻は攻撃できないルールらしいデス）

（あと、召喚は毎ターン一回ツスよね？）

正解だ、と頭で答え、

「俺のターン、ドロー！」

衛のターンがはじまる。

「アステカの石像を守備表示で召喚！」

「アステカの石像」

効果モンスター

星4/地属性/岩石族/攻 300/守2000

このモンスターを攻撃した時に相手プレイヤーがダメージを受ける場合、

その数値は倍になる。

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

（召喚は攻撃表示、守備表示、裏守備表示とあるんですよね？）  
（ちまちましてんなあ、強いモンスターでドカーンとやれよ）  
（でも、初手としては正解ですヨ）  
（ていうか攻撃したら即死ツス。攻撃力300ツスよ！？）

追加で説明すると、守備表示では攻撃されてもライフは減らない。  
初手としては十分だ。

フィールド

試験官 手札4枚

モンスターゾーン：バルバロス（攻撃力1900）

魔法罫ゾーン：伏せ1枚

衛 手札4枚

モンスターゾーン：アステカ（守備力2000）

魔法罫ゾーン：伏せ1枚

「それでは行くぞ！私のターン！ドロー！  
手札から可変機獣 ガンナードラゴンを召喚！」

（可変機獣 ガンナードラゴン）

効果モンスター

星7/闇属性/機械族/攻2800/守2000

このカードは生け贄なしで通常召喚する事ができる。

その場合、このカードの元々の攻撃力・守備力は半分になる。

（すごい、瞬く間に2体の高攻撃力モンスターを・・・）

（あれ？イケニエが必要なんじゃないのかよ？）

（効果を見ましたか？）

（なんかデメリットばっかッスね？）

何か来る、衛は感じた。

そして、それは的中した。

「バトル！ガンナードラゴンでアステカの石像に攻撃！」

（攻撃力1400で守備力2000に攻撃！？）

（頭狂ってんのか？）

（伏せが気になりますネ）

（返り討ちッスー！！）

頭の中でごちゃごちゃ言っているが、無視する。

「そして攻撃時、リバーカードオープン！スキルドレイン！

スキルドレインはライフを1000払い発動する。

発動後すべてのモンスター効果は無効となる！」

「スキルドレイン」

永続罠

1000ライフポイントを払って発動する。

このカードがフィールド上に存在する限り、

フィールド上に表側表示で存在する効果モンスターの効果は無効化される。

（ということとは？）

（おい、道化師、説明しろ）

（簡単に言っと今回は相手のモンスターの攻撃力が元の数字に戻り

マス)

(じゃ、あっちの奴らは攻撃力3000と2800の化け物モンスターッスか!?)

試験官

ライフ：4000↓3000

バルバロス：攻撃力1900↓3000

ガンナードラゴン：攻撃力1400↓2800

もちろん、このままではモンスターが破壊されてしまい、  
そして場がから空きになり直接攻撃をくらってしまう。

「いけっ、モンスターを破壊し「リバースカードオープン！」何っ  
!?!」

「罨カードD2シールドを発動！」

しかし、衛もまた伏せカードを発動する。

「なんだ、あのカード？」「初めて見るな。新しいカードか？」  
「わたしどっかで見た記憶あるんだけど・・・」「早く思い出しな  
さいよ!!」

「あのカードは・・・？」

見知らぬカードの登場に戸惑う観客の一人に小夜香もいた。

「あれはモンスター1体の元々の守備力を2倍するカードさ」

〈D2シールド〉

通常罠

自分フィールド上に表側守備表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターの守備力は、元々の守備力を倍にした数値になる。

「あ！・・・え」と、み、深山さん！？」

「三沢だ！！！」

「ご、ごめんなさい……。でも、なんであんなカードを？普通はマジック・シリンドー魔法の筒とか……」

マジック・シリンドー  
魔法の筒

通常罠（制限カード）

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

相手モンスター1体の攻撃を無効にし、

そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

「普通はね。多分彼のデッキにも入ってると思うよ」

「でも手札に來なかつた……？」

「それだけじゃない。なぜ彼が守備力を高めるカードを使ったか考えてみよう」

「えーと、アステカの石像の守備力が2000で2倍ってことは……！！！」

「そう、守備力4000だ。」

アステカの石像：守備力2000↓4000

「さらに本来ならばアステカの効果でもっとダメージを与えられたんだ」

「????それが?」

よく理解していない小夜香に向かって深山、もとい三沢はこう言った

「つまり、彼のデッキは守備力の高いモンスターを多く取り入れた、反射ダメージ中心のデッキということさ」

完璧な解答だ。さすが受験番号1番。伊達じゃない。

「迎撃しろ！アステカ！」

ガンナードラゴン

アステカ

攻撃力：2800

VS

守備力：4000

「ぐっ!!!」

試験官

ライフ3000↓1800

(よしっ!!!)

(そのままぶちかませ!!!)

(いや、相手ターンですよ?)

(水差すなッス!!!)

「くっ！メインフェイズ2！私はカードを1枚伏せてターンエンド！」

（ふん、私が伏せたカードは激流葬、もし召喚してくるならば即座に発動！

召喚しなくても不屈闘士レイレイ召喚で激流葬発動でアステカ除去だ！

D2シールドの効果は一体のみ！アステカさえ潰せば何とかなる！攻撃してこないだろうから攻撃反応型は無意味だし、攻撃力の高いモンスターがいるとは思えない！

後はどれだけ早くモンスターを召喚できるか、だ。）

（激流葬）

通常罠（制限カード）

モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚された時に発動する事ができる。

フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

（不屈闘士レイレイ）

効果モンスター

星4/地属性/獣戦士族/攻2300/守 0

このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になる。

次の自分のターン終了時までこのカードは表示形式を変更できない。

3ターン目終了時点

試験官 ライフ1800

手札3枚

モンスターゾーン：バルバロス（攻撃力3000） ガンナード

ラゴン（攻撃力2800）

魔法罠ゾーン：スキルドレイン 伏せ一枚（激流葬）

衛 ライフ4000

手札4枚

モンスターゾーン：アステカ（守備力4000）

魔法罨ゾーン：なし

この試験官は知っているのだろうか？

この状況の中説明することの意味を。

まあ、簡単に言うならば、

「俺のターン、ドロー！」

いわゆる一つの、

「魔法カード、大嵐発動！」

「な、何イ！？」

く大嵐く

通常魔法（制限カード）

フィールド上に存在する魔法・罨カードを全て破壊する。

負けフラグだ。

これにより互いのフィールドにはモンスターだけが残った。

「そして俺はアステカの石像を攻撃表示に変更！」

（なっ・・・正気ですか！？）

（あん？気が狂っちゃったのか？）

（救いようのないバカデス）

（皆、手札のカードちゃんと見てるツスか？）

「アイツバカだろwww」「せつかくの守備力4000を・・・」  
「うゝん、なにかある気がするんだけど・・・」「あんなのやけく  
そ以外の何でもないでしょ!？」

「・・・それは、試験をやめる、という意思表示かな？」

試験官はキレていた。

めったにいないディフェンシブタクティクスだったからだ。  
しかも受験生にしては特上の強さ。  
もし自分に負けてもこれなら十分合格圏内なのだ。

それを放棄した。それは自らへの侮辱か、そう感じた。

しかし、

「いいえ、これは勝利への第一歩です。」

そう言い切った。

「魔法カード発動!!!右手に盾を左手に剣を!」

「右手に盾を左手に剣を」

通常魔法

エンドフェイズ終了時まで、このカードの発動時に存在していた  
フィールド上の全ての表側表示モンスターの元々の攻撃力と元々の  
守備力を入れ替える。

「な、なんだとお！！！？！？」

バルバロス 攻撃力3000↓1200

ガンナードラゴン 攻撃力2800↓2000

アステカ 攻撃力300↓4000

「これでとどめだ！アステカの石像で神獣王バルバロスに攻撃！」

（よしっ！！）

（叩き潰せえ！！）

（他の皆さんはなにやら技名を叫んでましたが・・・）

（だから空気を読んでくださいッス！！！！！！）

そしてアステカはバルバロスの頭上に飛び上がり、

押し潰した。

バルバロス

アステカ

攻撃力：1200

VS

攻撃力：4000

「うわあああああ！！！！」

「アステカは左利きなんですよ（キリッ）」

試験官 ライフ1800↓-1000

「ありがとうございました!!」

「はい、お疲れ様。結果は後日発表だ。楽しみにしてくれ。しかし・・・」

「はい?」

「決め台詞はもっとカッコよくしろよ?」

「??? かつこいいじゃないですか???」

（これは・・・）

（サイアクだな・・・）

（酷いデス）

（ないッスね、これは）

衛の試合終了後、元の場所に戻ると、

「あれ? だれもいない・・・」

みゅ・・・三沢どころか小夜香すらいなかった。

「なんだ・・・。トイレかな?」

（女性にはいろいろとあるのです。察してあげなさい）

（振られたんじゃないの?）

（先ほどアナウンスで呼ばれてましたヨ）

（どこッスか!?）

そんな風に（脳内で）騒いでいると、

「ゴメーン！途中で試験始まっちゃって見れなかった〜！」  
「おっ、噂をすればつと。お疲れ、こっちも見れなくてごめん。どうだった？」

小夜香が戻ってきた。

「うん、勝ったよー！！見たかったから急いで来ちゃった」  
「そっちも勝ったか、いやー良かった。」

二人して喜んでいると

「二人ともおめでとう」

「あ、大地！」「え〜と、見原君？」

「三沢だ！」

み（ry）が来た。

「二人のデュエルは素晴らしかった。色々と研究させてもらっよ」  
「勝手にどーぞ」

「でもアンチは勘弁してねっ」

（アンチ???）

（安全地帯の略か？戦場にはなかったな）

（単純に対策デッキってことですネ）

（しかし影薄いッスね、この人）

そうして、他の受験生のデュエルを見たり、遅刻者が逆転勝利したりして試験が終わった。

決め台詞の問題を残して・・・

## 第二話（後書き）

本日はここまで

次、書き溜めたらまた投下します

### 第三話（前書き）

デュエル無しです。

ゲームキャラが登場します！

キャラの性格違っても許してください（汗

### 第三話

数日後、合格通知が来た。  
来なかったら困る。

これはデュエルアカデミアが舞台の小説だからだ。  
メタな話はここまでにしよう。

「よかった、ラーイエローか。」

（確か上からオベリスクブルー、ラーイエロー、オシリスレッドで  
したよね？）

（なんだ、試験官無傷で倒したのによ。ちっちなあ）

（ブルーは中学生から通ってる人だそうデス）

（エコヒイキってやつツス）

合格できなかった人もいるのに贅沢な奴らである。  
ちなみに、先ほどの色分けは寮の組み分けである。  
成績順に決まるらしい。

ちなみに女子は皆ブルーだ。

衛は小夜香からメールで知った。

少しうらやましいと思った衛である。

くデュエルアカデミアに向けての船の中く

「おおく、風が気持ちいいぜく」

（ものすごく紅茶が飲みたいです）

（以前はすんげー酔って大変だったぜ。時代の流れはすげえな）

（船の揺れは変わらない気がしますガ・・・）

（多分、衛っちの中だからじゃないスか？）

現在は甲板にいる。

海の青さが目に優しい。

船内では入学制同士がデュエルをしている。

もちろん甲板の上でも。

つまり衛はデュエル観戦をしていた。

まあ、ものすごいと呼べるデュエルは中々なかったので、割愛するが。

ついでに小夜香も乗船しているらしいが・・・

姿は見かけていない。

携帯も使えないから連絡も取れない。

まあ、簡単にまとめると、衛は一人ぼっちだ。

「はぁ・・・」

（やることがないですね・・・。私たちもデュエルは一通り覚えましたが・・・）

（あとはカードと戦術か）

（あれ？戦略？戦術？・・・どちらが正しいのでシヨウ？）

（どっちでも良いッス）

そう、教え終わったのだ。

デュエルの基本は。

しかしカードがないためやりたい戦術どころかまともなデッキさえ組めない。

いかんせん衛は受験生。バイトの暇などない。小遣いも正直不満だ。それでも脳内メンバーにデュエルを知ってもらいたい、楽しんで欲しいと思っているので、結構貯金をはいたり、小遣いの前借りをしたりして買ってきたのだが、

（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）  
らしい。

何枚もいいカードを見つけたが、デッキを作るには不十分だ。

まあ、4人と衛の経済状況を知っているし、集めるのも時間がかかるかわかっているのだからこちらは急がなくてもいいが、今の問題は・

暇である。この一言に尽きる。

（だあゝゝゝ、やってられん！俺様のために酒と女を持ってこい！）

今まで我慢してたが、我慢の限界だ！！！！！！！！！！）

（はしたないですよ！もっと誇りを持って行動しなさい！！！！）

(ではミイが愉快なショーを致しましヨウ)

(順番に言っと、衛は未成年かつ初心<sup>うぶ</sup>なんで酒も女もムリッス。

その人は誇りではなく埃ならたくさんあるッス。

そして、  
いまだに互いの顔も見えないのにどーやったらショーが見

れるんスか？)

(うるせーんだよ、人の頭の中で喧嘩すんな！そして海燕<sup>バシリ</sup>！チヨーシに乗るな！)

そういえば、説明してなかった。

彼らの今の状態は、

「互いの声はわかるが、顔は見えない。

中の4人はそれぞれ別の部屋にいて、その部屋の黒い箱<sup>テレビ</sup>から衛の見える風景が見える。

ちなみにドアもあるが開かない」

という感じだ。

部屋の内装は

ロビン↓最初は汚かったが、今ではだいぶきれいになった。意外に

掃除は楽しい

アイク↓悪くネエ、がせめて酒が欲しい

ピエール↓住みやすい

海燕↓テレビとベッドのみの狭くシンプルなおツス

・・・失礼、感想はこんなところだ。一人新しい趣味が発覚して何よりだ。

まあ、とりあえず、着くまで時間があるので、部屋で寝よう、という結論に至った。

至ったのはいいのだが・・・

どうしてこうなった。

衛はひそかに頭を抱えた。

「ほら、はやく構えなさいよ！決闘者<sup>デュエリスト</sup>でしょ！？」

・・・ほんとになんで・・・

（30分前）

部屋に戻り寝ることにした衛脳内一行。

こう書くと痛々しい子に衛がなるので、これ以降5人組とする。  
今決めた、後悔はない。

その途中の話だ。

（たしか、衛殿が入るデュエルアカデミアとやらはデュエルのプロを育成するんですよね）

（んで、プロになるには成績が悪いとダメなんだったか？）

（だいたいそんな感じでしたネ）

（女性はさらにかわいいとアイドルデュエリストとしても売れる・・らしいツス）

「その通り。でも多くのアイドルデュエリストはあんまり強くないよ。」

携帯を耳に当てながら喋ると不自然ではないことによつやく気が付いた5人組。

プロデュエリストはその名の通りデュエルのプロだ。

デュエルで勝つてデュエルキングを目指す。

つまりデュエルの最強を目指して日々デュエルをしている。

初代デュエルキング、武藤遊戯を倒すことを目標に。

アイドルデュエリストは一応こちらでもキングを目指してはいる。

だが、それ以上に有名になることの方が重要で、

歌やダンス、その他いろいろやることが多いのだ。

だからデュエルに割ける時間が少なくなり、プロより弱くなってしまつのは仕方のないことだった。

だが、やはりこちらでもデュエルが強いほど人気が出る。

しかし「魅せるデュエル」をする必要があるので、そちらにも気を配らなければならない。

正直、こう書いているとプロになる方が簡単なような気がしてきた・・。

「やっぱりアイドルはアイドルらしく歌やダンスに集中してればいいのに。」

プロになんてどーせ勝てないんだから。」

これが一般の認識だ。そんな感じで話していると

「ちょっと！そのあんた！！！」

ピンク色の髪の少女がこちらをにらんできた

「アイドルデュエリストなめてんじゃないわよ！！！」

「は？・・・ああ、何？どっかのアイドルデュエリストのファン？  
そっかそっか、けなしてごめん。彼女たちも本気だもんね。」

軽く謝る衛。正直どうでもいいから早く行きたいのだ。

「それじゃ、これで」

「待ちなさい」

「全然違うわ、人気のアイドルのデュエルはお遊びに近い。

新人も先輩の顔に泥を塗ってしまうのを恐れてお膳立て。

プロはプロで一部の人間だけだけどTVのためにわざとアイドルに  
負けたりして、

とてもじゃないけどキングを目指してるとは言えない。

その点はあるの言う通り。最近のデュエル界はふざけている。

武藤遊戯がデュエルキングの時代がなつかしいわ。

でも今回言いたいことは違う」

「？なんか付け足しがあつたような・・・」

「黙りなさい！

あんたはアイドルデュエリストという職業をけなした・・・。

これは許せない！

未来のアイドルデュエリスト兼デュエルキングであるこのアタシ、  
『嶺開花』が成敗するわ！！！」  
「・・・はあ」

うわぁ、ものすごく痛い子だ。

そう思った衛であった。

くそしてく

「行くわよー！デュエル！！！」 「はあ・・・デュエル」

### 第三話（後書き）

第三話でした。いかがでしょうか？

次回、自作ではないオリカが登場します。

結構好きなカードです。

皆様はどうでしょうか？

感想を書いていただけるととても嬉びます。

ヤル気も出ます。

ただし、書ける時間は増えません。・・・鬱だ・・・orz。

#### 第四話（前書き）

やっとユニークとか見れました。

今までどこにあるか知らないし、読み方もわからない。

そして、実験結果を書いたノートも無くした。

そんな低テンションで最後の方書き上げました。

やっと（ゲームの）オリ力です。

## 第四話

「アタシの先攻！ドロー！」

先攻は嶺開花だ。

「アタシはマジカル・コンダクターを召喚！

そしてテラフォーミングを発動！

魔法都市エンディミオンを持つてくるわ！

そしてそのまま発動！」

《テラ・フォーミング》

通常魔法

自分のデッキからフィールド魔法カード1枚を手札に加える。

《魔法都市エンディミオン》

フィールド魔法

自分または相手が魔法カードを発動する度に、

このカードに魔力カウンターを1つ置く。

魔力カウンターが乗っているカードが破壊された場合、

破壊されたカードに乗っていた魔力カウンターと

同じ数の魔力カウンターをこのカードに置く。

1ターンに1度、自分フィールド上に存在する魔力カウンターを

取り除いて自分のカードの効果を発動する場合、

代わりにこのカードに乗っている魔力カウンターを取り除く事ができる。

このカードが破壊される場合、代わりに

このカードに乗っている魔力カウンターを1つ取り除く事ができる。

「マジカル・コンダクターに魔力カウンターが合計4個乗るわ。」

（魔力カウンター？）

（魔って着く位だから魔法に関係するんじゃない？）

（多分そうですネ）

（後でめんどくさそうッス）

「そしてマジカル・コンダクターの魔力カウンターを4個取り除き、手札からクルセイダー・オブ・エンディミオンを特殊召喚！」

《クルセイダー・オブ・エンディミオン》

デュアルモンスター

星4 / 光属性 / 魔法使い族 / 攻1900 / 守1200

このカードは墓地またはフィールド上に表側表示で存在する場合、通常モンスターとして扱う。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードを通常召喚扱いとして再度召喚する事で、

このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る

●1ターンに1度、フィールド上に表側表示で存在する

魔力カウンターを置く事ができるカード1枚に魔力カウンターを1つ置く事ができる。

この効果で魔力カウンターを置いたターンのエンドフェイズ時まで、このカードの攻撃力は600ポイントアップする。

「カードを1枚セットして、ターンエンド！」

「1ターンで2体もモンスターを召喚した!？」

「ふっふーん、驚いた?これがマジカル・コンダクターの効果よ!手札と墓地から特殊召喚できるの!」

ただし、そのレベル分の魔力カウンターを取り除かなきゃならないけどね。

でも、魔力カウンターの乗りやすさはピカイチよ!」

### 《マジカル・コンダクター》

効果モンスター

星4 / 地属性 / 魔法使い族 / 攻1700 / 守1400

自分または相手が魔法カードを発動する度に、

このカードに魔力カウンターを2つ置く。

このカードに乗っている魔力カウンターを任意の個数取り除く事で、取り除いた数と同じレベルの魔法使い族モンスター1体を、

手札または自分の墓地から特殊召喚する。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

（モンスターの召喚と魔力カウンターの補充・・・）

（弱点はステータスがチョイと低いぐらいのモンか、でもそんなに低くネエな）

（あと効果使用が1ターンに1回と種族が魔法使い限定ってトコですネ）

（でも展開力が半端ないツス!）

「ちっ、厄介な・・・。俺のターン、ドロー!!」

アステカの石像を守備表示で召喚! 2枚セットでターンエンド」

フィールド

嶺開花：ライフ4000

手札：2枚

モンスター：コンダクター（攻撃力1700）      クルセイダー・

オブ・エンディミオン（攻撃力1900）

魔法罫：魔法都市エンディミオン      伏せ1枚

橘衛：ライフ4000

手札：3枚

モンスター：アステカ（守備力2000）

魔法罫：2枚

（いつも通り・・・という所ですか）

（互いに定石通りだな）

（まあ、様子見というところですかネ）

（焦りは禁物ってことッスね）

「アタシのターン、ドロー！」

嶺開花のドローした手がハート型の軌道を描く！

アイドル（候補）としての決めポーズ、

または奇跡のドローディスティニーなのだろう

しかしぶっちゃけ筆者的に言わせてもらおうと

「ウゼエ・・・」

「アタシのドローにケチつけるな！」

考えるのに3日、実践するのに2ヶ月かかったんだから！！」

（素晴らしい努力ですね・・・。ただのお嬢様ではない、ということですか）

（バカな嬢ちゃんだな、オイ）

（素晴らしい決めポーズ、ミーも欲しいデス）

（ていうか関心どころが違うッス）

正直マジに無駄だ・・・

「よし来た！アタシは魔力掌握を発動！」

## 《魔力掌握》

### 通常魔法

フィールド上に表側表示で存在する魔力カウンターを乗せる事ができるカード1枚に魔力カウンターを1つ置く。その後、自分のデッキから「魔力掌握」1枚を手札に加える事ができる。

「魔力掌握」は1ターンに1枚しか発動できない。

「アタシは魔法都市エンディミオンに魔力カウンターを1つ置き、2枚目の魔力掌握を手札に加える！」

### 魔力カウンター

魔法都市エンディミオン 0 ↓ 2

マジカル・コンダクター 0 ↓ 2

(?魔力カウンターの数があってませんよ?)

(効果だろ?しかし計算が面倒だな、オイ)

(その通りデス、まさかあなたが解説とは・・・)

(いいから、次見逃すツスよ。)

マジカル・コンダクターは効果でモンスター呼べるんから)

「そして魔力カウンターをマジカル・コンダクターから2個取り除いて、

手札から見習い魔術師を特殊召喚！」

## 《見習い魔術師》

### 効果モンスター

星2 / 闇属性 / 魔法使い族 / 攻 400 / 守 800

このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、フィールド上に表側表示で存在する魔力カウンターを

置く事ができるカード1枚に魔力カウンターを1つ置く。

このカードが戦闘によって破壊された場合、自分のデッキからレベル2以下の魔法使い族モンスター1体を自分フィールド上にセットする事ができる。

「効果により魔法都市エンディミオンに魔力カウンターを加える！  
・・・あ、クルセイダー・オブ・エンディミオンを再度召喚！  
そして効果により魔法都市エンディミオンに魔力カウンターをさらに加えるわ！」

魔力カウンター

魔法都市エンディミオン 2 ↓ 4

マジカル・コンダクター 2 ↓ 0

クルセイダー・オブ・エンディミオン 攻撃力1900 ↓ 2500

「・・・今、自分のモンスターの効果忘れてなかったか？」

「・・・き、気のせいよ！デュエル続行！」

バトルフェイズ！「の前に罠カード発動！」・・・え？」

「罠カード、ディフェンダース・マインド！」

《ディフェンダース・マインド》

永続罠（TF4オリジナル）

このカードはメインフェイズ時にしか発動できない。

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターはすべて守備表示になる。

また、自分フィールド上に表側守備表示で存在するモンスターは守備力が倍になり、

攻撃表示にする事ができない。

「ディフェンダース・マインド」は、自分フィールド上に1枚しか

表側表示で存在できない。

「これによりアステカの守備力は4000となる!」

アステカの石像 守備力2000 ↓ 4000

「それじゃ、バトルフェイズに入ってk「チェーンして速攻魔法、エネミーコントローラー!」・・・はあ!？」

《エネミーコントローラー》

速攻魔法

次の効果から1つを選択して発動する。

- 相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の表示形式を変更する。

- 自分フィールド上に存在するモンスター1体をリリースして発動する。

このターンのエンドフェイズ時まで、相手フィールド上に表側表示で存在する

モンスター1体のコントロールを得る。

「アタシは2つ目の効果を使い、見習い魔術師をリリースして、アステカの石像のコントロールを得るわ!

さらに、効果により魔力カウンターが乗るわ!」

魔力カウンター

魔法都市エンディミオン 4 ↓ 6

マジカル・コンダクター 0 ↓ 2

(チェーン?)

(鎖、だったか?)

（欧米諸国の名は伊達じゃないですネ）

（オイラもよくわかんないッス）

説明については作者もよくわかっていないので割愛する  
とりあえずわかることは、

「やば・・・!!」

衛の場がから空きなことだ

「フフン、これで終わりよ！二体で直接攻撃！」  
ダイレクトアタック

「くっ、畏カード、メタル・リフレクト・スライム発動！」

《メタル・リフレクト・スライム》

永続畏

このカードは発動後モンスターカード（水族・水・星10・攻0/  
守3000）となり、

自分のモンスターカードゾーンに守備表示で特殊召喚する。

このカードは攻撃する事ができない。（このカードは畏カードとしても扱う）

メタル・リフレクト・スライム 守備力0 ↓ 3000 ↓ 6000

「はあ！？守備力6000！？攻撃中止！冗談じゃないわよ！」

（危なかったですね）

（間一髪だな）

（今回はさすがですネ）  
（なんで上から目線なんスか？）

「メインフェイズ2！・・・うー、ターンエンド。」  
「エンドフェイズにアステカの石像は戻ってくる！」

フィールド

嶺開花：ライフ4000

手札：2枚（内一枚は魔力掌握）

モンスター：コンダクター（攻撃力1700 魔力カウンター2  
個） クルセイダー・オブ・エンディミオン（攻撃力1900）

魔法罫：魔法都市エンディミオン（魔力カウンター6個）

橘衛：ライフ4000

手札：3枚

モンスター：アステカ（守備力4000）メタル・リフレクト・  
スライム（守備力6000）

魔法罫：メタル・リフレクト・スライム ディフェンダーズ・マ  
インド

手札は2枚。しかも、一枚は魔力掌握とわかる。  
言うまでもないことだが、手札が多い方が選択肢は広がっていく。

「俺のターン、ドロー！」

（さあ、反撃です！）

（こないだみたいにぶちかませ！）

（罫の効果でムリデス）

（だーかーらー・・・はあ、もうイイツス）

「フィールド魔法、ダーク・アリーナ発動！」

「は？え、ちょっと待って！」

「待たん！これによりそつちのフィールド魔法は破壊だ！」

（やりました！）

（メンドくせえのが一枚なくなったな！）

（数えるのが面倒だったんですネ）

（正直、覚えられないッス）

作者もたまに忘れる（本当）

「ちょっと！なんてことしてくれんのよ！」

嶺開花のデッキはぶつちやけると「魔力カウンター」だ。

フィールド上の魔力カウンターを使用して相手を翻弄するデッキである。

その内のキーカードの一つが魔法都市エンディミオンだ。

大量の魔力カウンターを乗せることができ、除去もされづらい、なかなか優秀なカードだ。

しかしながら、フィールド魔法であるため、別のフィールド魔法を使われるとすぐに破壊されてしまうのだ。

さらに、その効果により魔力カウンターの使用の肩代わりは１ターン１回のみ。

しかも、魔力カウンターを使うカードはまだまだ多いとは言えない。つまり、大量の魔力カウンターを消費しきるのが難しいのだ。

逆に言えば、多くのカウンターが次も使える、次の備えにできる、ということか。

その点ではなかなか扱いづらいデッキである。

ただし、うまく回れば相手フィールドをがら空きにすることもできる。

一長一短なデッキだ。

まあ、今回は彼女の生命線ともいえるカード——しかも力

ウンターが結構乗っていた――が破壊されたわけであって

「せっかくカウンター貯めたのに……!!」

こんなのはよくあることだが、実際かなり困る。

「不用心なお前が悪い！俺はカードを2枚セット、ターンエンド！」  
「ふ、フンだ。あんたがフィールド魔法発動したから、  
アタシのマジカル・コンダクターに魔力カウンターが乗るからいい  
もんねー！」

魔力カウンター

マジカル・コンダクター 2↓4

フィールド

嶺開花：ライフ4000

手札：2枚（内一枚は魔力掌握）

モンスター：コンダクター（攻撃力1700 魔力カウンター4  
個） クルセイダー・オブ・エンディミオン（攻撃力1900）

魔法罫：無し

橘衛：ライフ4000

手札：1枚

モンスター：アステカ（守備力4000）メタル・リフレクト・  
スライム（守備力6000）

魔法罫：メタル・リフレクト・スライム デイフェンダーズ・マ  
インド ダークアリーナ 伏せ2枚

「アタシのターン、ドロ―！アタシ、スタンバイフェイズに罫発動  
！」「ふえ？」

「バトルマニア！」

「・・・へ、へえ、そう、良くわかんないけどとりあえず、  
クルセイダー・オブ・エンディミオンの効果でコンダクターに魔力  
カウンターを乗せて攻撃力アップ！

さらに魔力掌握で魔力カウンターをコンダクターに乗せるわ！そして  
魔力掌握をサーチ！」

クルセイダー・オブ・エンディミオン 攻撃力1900 ↓ 2500  
マジカル・コンダクター 魔力カウンター4 ↓ 8

「まだまだ！アタシはおろかな埋葬を発動！」

《おろかな埋葬<sup>まいそう</sup>》

通常魔法

自分のデッキからモンスター1体を選択して墓地へ送る。

「あほか？自分から墓地にモンスター送るなんて・・・」

「黙りなさい！後悔するわよ！アタシは神聖魔導王<sup>しんせいまどうおう</sup> エンディミオ  
ンを墓地に送るわ！」

衛には学習能力がないのだろうか？

マジカル・コンダクターの効果をもう一度聞くべきだろう。

「これにより、また魔力カウンターが増える！」

魔力カウンター

マジカル・コンダクター 8 ↓ 10

「そして、マジカル・コンダクターの効果で魔力カウンターを7個  
取り除いて、墓地から神聖魔導王 エンディミオンを攻撃表示で特  
殊召喚！」

そして、魔力掌握を捨てて効果発動！ディフェンダーズ・マインドを破壊する！」

魔力カウンター

マジカル・コンダクター 10 ↓ 3

《神聖魔導王 エンディミオン》

効果モンスター

星7 / 闇属性 / 魔法使い族 / 攻2700 / 守1700

このカードは自分フィールド上に存在する

「魔法都市エンディミオン」に乗っている魔力カウンターを6つ取り除き、

自分の手札または墓地から特殊召喚する事ができる。

この方法で特殊召喚に成功した時、

自分の墓地に存在する魔法カード1枚を手札に加える。

1ターンに1度、手札から魔法カード1枚を捨てる事で、

フィールド上に存在するカード1枚を破壊する。

「げえ！何してくれてんだよ！」

「さっきのお返しよ！」

（なんて声を出すのですか、あなたは・・・）

（戦場ではこんなの日常茶飯事だぞ！）

（油断すると即、死につながりますからネ、私もそれで死にましたケド）

（じゃあ黙ってるッス）

まったくもってその通り、これは真剣勝負だ。・・・理由はくだらないが

「何がくだらない理由ですって！？もう許さない！アタシがぶっ潰す！」

「俺何も言ってねーし！この間からなんだもう！！しかも女がそんな言葉使っな！！！」

「うっさい！デュエル続行！アタシはマジカル・コンダクターを生け贄にして、ブリザード・プリンセスを生け贄召喚！」

《ブリザード・プリンセス》

効果モンスター

星8 / 水属性 / 魔法使い族 / 攻2800 / 守2100

このカードは魔法使い族モンスター1体をリリースして

表側攻撃表示でアドバンス召喚する事ができる。

このカードが召喚に成功したターン、相手は魔法・罫カードを発動する事ができない。

「これであんたはこのターンもうそのセットカードは使えないわ！」

「まじかよ！（結束　UNITYが・・・）」

《結束<sup>けっそく</sup>　UNITY》

速攻魔法

自分のフィールド上のモンスター1体を選択する。

選択したモンスターの守備力はエンドフェイズまで

自分のフィールド上に表側表示で存在する

モンスター全ての元々の守備力を合計した数値になる。

衛は相手がアステカを攻撃することを読んでいた。

そして、この魔法で一気に決めるつもりであった。

しかし、もうそれもかなわない・・・

「それじゃ行くわよ！クルセイダー・オブ・エンディミオンでアステカの石像を攻撃！」

メタル・リフレクト・スライムはあとでゆっくりと始末するわ。」

しかし、そうは問屋が卸さない。  
クルセイダー・オブ・エンディミオンが攻撃したのは、

メタル・リフレクト・スライムだ

「えっ、うそ、キャア！」

|                   |                    |
|-------------------|--------------------|
| クルセイダー・オブ・エンディミオン | メタル・リフレクト・ス<br>ライム |
|-------------------|--------------------|

攻撃力：2500

VS

守備力：3

000

嶺開花      ライフ4000 ↓ 3500

「な、なんでよ！」

「フィールド魔法の効果さ。ま、バトルマニアは無駄になったが、  
許容範囲内だろう」

《ダーク・アリーナ》

フィールド魔法（TF1オリジナル）

お互いのモンスターの攻撃対象は相手が選択する。

また、攻撃可能なモンスターが存在する場合は必ず攻撃を行わなければならぬ。

《バトルマニア》

## 通常罠

相手ターンのスタンバイフェイズ時に発動する事ができる。

相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターは全て攻撃表示になり、

このターン表示形式を変更する事はできない。

また、このターン攻撃可能な相手モンスターは攻撃しなければなら  
ない

「くっ、しかたない、ターンエンドs」できないんだなあ、これが。  
「な、なんで・・・」

「お前のモンスターは全部攻撃表示だろう？」

ダークアリーナは攻撃可能なモンスターはすべて攻撃しなければなら  
ない。

しかも対象はすべて俺が決める。」

(つまり・・・?)

(嬢ちゃんはある鉄のキモい物体に攻撃しなきゃいけないのさ)

(全部返り討ちDEATH)

(なんか怖いッス！)

めんどいので戦闘シーンは割愛

ぶっちゃけ全部がメタル・リフレクト・スライムに魔法を跳ね返さ  
れて終わるだけだが

嶺開花 ライフ3500↓3000

「くっ、手札がもうない・・・ターンエンド。」

「俺のターン、ドロー！カードをセットしてターンエンド」

嶺開花：ライフ3000

手札：0枚

モンスター：クルセイダー・オブ・エンディミオン（攻撃力1900）

神聖魔導王 エンディミオン（攻撃力2700）

ブリザード・プリンセス（攻撃力2800）

魔法罫：無し

橘衛：ライフ4000

手札：1枚

モンスター：アステカ（守備力2000）メタル・リフレクト・スライム（守備力3000）

魔法罫：メタル・リフレクト・スライム ダークアリーナ 伏せ  
2枚（内1枚UNITY）

これでこう着状態の二人。しかし、決着の時は近い。

「アタシのターン・・・ドロー！！！！」

「スタンバイフェイズにバトルマニア発動！」

「そんなのどうでもいい！これに賭ける！強欲の壺発動！」

《強欲な壺》  
（じやうよくなつぼ）

通常魔法（制限カード）

自分のデッキからカードを2枚ドロウする。

（ここで手札補強！？）

（なんつー運・・・）

（こ？）

（下ネタ禁止ッス）

嶺開花 手札1↓2

「・・・勝った」

「・・・おいおい、冗談もほどほどにしろよ?」

「ここでジョークなんて言うかしら? 手札から地砕き発動!」

### 《地砕き》

#### 通常魔法

相手フィールド上に表側表示で存在する守備力が一番高いモンスター1体を破壊する。

「うげ・・・しかたない、チェインしてUNITY発動! 対象はアステカ!」

（なるほど、アステカの守備力をあげて）

（元から高い守備力のキモい鉄を残そうって魂胆か）

（ギリギリですネ）

（・・・）

「あっそ、それじゃアステカは破壊ね。」

続いて、神聖魔導王 エンディミオンの効果で手札からテラ・フォーミングを捨ててメタル・リフレクト・スライムを破壊するわ!」

「げっ!?!?!?」

（あ）

（あ）

（おお、これでモンスターは0（ゼロ）、フィールドはがら空き、チェックメイトですネ）

（終わったツスね、やっぱり）

「これで終わりよ! 全員でダイレクトアタック!」

「ぎゃあああああ!」

橘衛 ライフ4000 ↓ 0

（手札のアレ・・・）

（こないだの試験の決めカードか？）

（右手に盾を左手に剣を、ですネ）

（完全にいらぬ感じだったツス）

最後の最後で事故がばれた衛であった。

Side????

「くう~~~~~~~~、二人ともいいデュエルだったな~~~~  
~~~~！」

急いでなかったらデュエルしたかったぜ！

よし、アカデミアに着いたらすぐデュエルしてもらおう頼みに行こう！

くあ~~~~~~~~、今から楽しみだぜ！！！！

うお！？ヤバイヤバイ、翔たちに怒られる！トイレが遠かったことにしようー！」

第四話（後書き）

サイゴノヒトハイッタイダレナンドー（棒）

感想お待ちしてます。

感想を限定していることを知った。

こつちも最近。マジで死ねばいいのにね！。

誤字修正しました。右手に剣、左手に盾とか普通じゃねえか・・・

o r z

第五話（前書き）

やっとできたー

デュエル無しです

なんとなくわかってきたと思いますが、デュエルの有無は交互です
現在は、ね

第五話

く船から降りてく

「だーかーらー、さっきからごめんって言ってるだろ!？」

「誠意が足りないのよ誠意が!」

（紳士的ではないデスね・・・）

（口調うつってんぞ）

（ミーの影響力は半端ないのですヨ!でも地味に違いマス）

（細かいことは置いておくッス。リア充爆死しろッス）

まったく張^{バシリ}海燕の言う通りである。

付き合ったことがない人の気持ちも考えて欲しいものだ。

（海燕殿?）

（あん?どした?）

（なにやら怒っているようですが・・・）

（いや、気のせいッス）

そんな中、ぎゃーぎゃーわめく二人^{バカップル}
当然目立つわけであって、

「あ、いたいた。おーい、まもっちー!」

みつかった・・・

「ん?おー、小夜香じゃん、久しぶりー!」

「ちよっと!まだ話は終わってないわよ!」

「そっちはどちら様ー？」「アイドルデュエリスト候補（笑）^{かつこわらい}だつて」

「かつこわらいまでつけるな！あと、候補を取れ！未来のデュエルキングを付け足せ！」

・・・騒々しい。リア充爆死しろ。ハーレムとかまじやってらんねー！。

んんっ、失礼、私情が入った。
やかましく騒いでいる三人。
そこに、

「あなたたち新生？なら急いだ方がいいわよ。まだ時間があるとはいえ、歓迎会があるから。
時間には余裕を持ちたいでしょう？」

おっp・・・胸の大きい女性がやってきた。
制服的には学生のような。
小夜香が代表して、

「えーと、わかりました。ありがとうございます。」

あの、どちら様でしょうか？あ、私は十文字小夜香です。」

「ねえ、アタシの時と対応が違くない？あ、嶺開花です」

「当たり前だろ？なんか年上に見え」「なにか？」イエ、ナニモアリマセン。

橘衛デス、ヨロシクオネガイシマス。」

「そう、私は天上院明日香よ。よろしく。明日香でいいわ。あなた

たちと同じ新入生よ。

とはいうものの、中学生からの繰り上がり組だけだね。これからよろしく。」

デュエルアカデミアには中等部が存在する。

中学入試も行われる。

しかし、中学生になる直前の子供がデュエルで強いわけもなく、たいていは親に恵まれた、と言っておこうか。まあ、ぶっちゃけ¥だ。¥の力でカードをそろえて子供に渡し、

「自分の子はデュエルアカデミアの中等部にいる」と見栄をはりただけなのだ。

いつの時代でも一部の金持ちの意地汚い親というものは体裁を気にするものだ。

まあ、そうでない親の方が絶対に多いのだが。

言うのはあれだが、このよいおっp・・・天上院明日香もその一人と言ってもいいだろう。

入った後の努力なんか知らん。多分したのだろうが。

そうでなければデュエルアカデミア高等部にいるわけがない。

(美しい・・・)

(いい乳してんじゃネエか)

(ミーのショーで驚いた顔が見たいですネ)

(どこぞのお嬢様ツスカ・・・、はあ)

「?」

衛は首をかしげた。

「まもっち、どしたのー?」

「いや、なんでもない・・・」

「あつそ、んじゃ早く行きなさいよ。あんたの寮はあつち」

嶺開花が指差したのは・・・いかにも普通の寮だった。

「・・・あれかあ」

「それじゃ、また歓迎会でね～～～！」

「次こそちゃんと謝ってもらうからね！」

「おう、またなー」

さつさと別れを済ませて部屋に行く。

そして部屋で見たものは・・・！！

「ふつうだ・・・」

なんの変哲もないただの部屋だった。因みに隣の部屋は三沢の部屋だった。

~~~~~そのあたりをぶーらぶら~~~~~

「・・・迷った・・・」

（はぁ・・・）

（お前はアホか）

（救いようが無いですヨ）

（情けないッス）

「うるせーよ、あほ共。」

（せめて、寮監殿に地図をもらえば・・・）

（男なら探検するだろ？）

（その結果がこんな状況ですガ）

（というか時間大丈夫ツスか？）

因みに、歓迎会まであと20分程度、少しの余裕はあるのだが・・・  
迷子になった衛にそんな余裕はない。

「はぁ・・・もう疲れた」

とぼとぼ歩いている衛、元気がない。まあ当たり前か。  
かれこれ30分近く歩いているのだから。

・・・逆にそれだけ歩いても場所がわからないデュエルアカデミア  
の広さに驚嘆すべきなのか？

「おい、なにやってんだ！ここはオベリスクブルー専用だぞ！」

突然、怒鳴り声が聞こえた。

その後、何人かが争っている声が聞こえる。

（騒々しい・・・）

（なんだなんだ？喧嘩か？）

（見に行きまショウ）

（人がいるってことは道が聞けるツス！）

「じゃ、いくか」

~~~~デュエル場~~~~

ここはオベリスクブルー専用デュエル場。

アカデミアの中で二番目に大きいデュエル場だ。

最も大きいデュエル場は実技試験や何か大きなイベントでのデュエルなどに使われ、

普段は生徒の寮にこだわらない自由なデュエルのために開放されている。

まだ学校初日とあつて開放されてはいないが。

話を戻そう。

「お前らみたいな落ちこぼれのオシリスレッドが使っている場所じゃねーんだよ！」

「別に誰もいないんだしちょっとぐらい良いだろ？」

どうやらオベリスクブルーが3人でオシリスレッドが2人いるようだ。

何か争いをしているらしい。

主にオベリスクブルーの内取り巻きっぽい二人がつつかかっているようだ。

なにやらオシリスレッドがいることが気に食わないらしい。

醜いものだ。

もし中学に入れなかったなら自分もオシリスレッドになっていたかもしれないのに。

「あのくすいまま」あなたたち！そこで何をしているの！？」

衛が道を聞こうとしたまさにその時、さらに後ろから誰かが声を上げた。

「て、天上院君！」

それは、先ほど衛が出会った女子生徒・・・天上院明日香だ。

「いや、なあに、デュエルアカデミアでのルールを教えようと思っ
てね。」

「そう、でも後にした方がいいわよ。そろそろ歓迎会の時間だから
確かに残り時間はごくわずかだ。」

「くっ、わかったよ、君の言う通りだ天上院君。
ふん、覚えているよドロップアウトボーイ！」

一番偉そうなやつが歩き出すと取り巻きもついていく。
まるで某人気小説のキャラのようだ。

どれとは言わないが、まあ稲妻型の傷跡と言っておこう。

「・・・なんだ貴様！？ライエローごときが俺の道をふさぐな！」

ぼけーっと突っ立っていると怒られた衛。
しかし、理不尽。

(・・・)

(・・・アーン！？)

(ヨホホ、楽しくなりそうですヨ。久々にキレてしまいそうですネ)
(オイラ、こいつ嫌いッス)

「なあ、オベリスクブルーってそんなに偉いのか？」

言ってしまった・・・

そう思っても後の祭り

あとは歯車が勝手に回る

「なんだと!？」

「貴様、こちらは中等部主席だったお方、万丈目殿でおわすぞ!？
控えおろつ!」

「ごめん、俺、高校からだから中学ってどれだけすごいかわかんない。

というか、知ってる？高校はほとんど中学の成績って関係なくなるんだよ？

これからどれだけ勉強したかによるからね。そんなことも知らないの？」

・・・普通の学校ではそうかもしれない。

しかしここはデュエルアカデミア。「普通」や「通常」が通じない場所。

簡単に言うと、デュエルの成績は持っているカードによっても左右されうる可能性があるのだ。

単純に努力では現状覆り難いもの・・・金だ。

お金があればすごいカードをたくさん買える、プロに教えてもらえ

る、八百長もできる。

おかね
この力は偉大なのだ。

因みに、万丈目は万丈目グループという大手の御曹子だ

「・・・プツ。あつはつはつは。ばつかじゃねーの？」

「デュエルアカデミアではそのようなもの通用すると思うておるのか？」

「フン、言わせておけ、しかし貴様の顔も覚えておいてやったからな。

感謝しろよ？この俺様に覚えられるのは光栄なことだからな！

あそこのドロップアウトボーイと一緒に覚悟しておけよ！」

そう笑いながら去って行つた万丈目達
フラグメイカー

そして残された面々は

「何スか、あれ。感じ悪いッス！」

「まあ、気にすんなよ翔。それとお前いいこと言っな！」

「ありがとう、ただイラついたただけだね」

「そう、怒るなつて。あ、俺は遊戯十代！よろしくな！」

「あ、ぼくは丸藤翔っていうんだ。よろしくお願いするッス！」

「おう、俺は橘衛。衛でいいぞ」

「じゃあ、オレも十代でいいぞ」

「じゃあボクも翔でいいッスよ」

「二人ともよろしく。・・・そういや十代って入学試験のとき機械族モンスターを使った教師に勝った奴だな！？」

「おお！見てくれてたのか！？」

「アニキ、遅刻してさらに実技の一番偉い先生・・・クロノス先生

に勝つ人を忘れるのは難しいよ・・・」

「たしかにな」

「そうか？」

「絶対そうッス」

「・・・ところであなたたちは行かなくていいの？歓迎会始まつちやうわよ？」

「・・・ああ！」「」

（すっかり忘れてました）

（やっちまったな）

（ヨホホ、時間まであとちよつとですヨ）

（そんなことより、キヤラ被りが気になるッス）

忘れ去られていた天上院とも会話を済ませて、三人は走って行った。その後ろ姿を見てから天上院も自分の寮に戻って行った・・・

余談だが、歓迎会は各寮ごとに行い、場所もその寮で行われる。

十代と翔の二人とは寮が別だったので、場所のわからない衛は結局遅れてしまい、

その日の晩飯にありつけなかった。

「不幸だ！」

（自業自得ですね）

（だな）

（しかないですネ）

（当然ッス）

第五話（後書き）

そろそろ自作のオリ力を作らねば・・・

チートになりすぎなければいいのだが・・・

多分、近々オリ力の募集するかもです。

詳細は後日決まってからにします。

あと、やっぱりセリフの前に名前書いた方がわかりやすいですかね？
自分で見ててわかりづらかったし・・・

感想お待ちしてます。

編集しました（2011/7/9）

第六話（前書き）

マジ遅れてすみませんでした。

もうちょっとで5000アクセス突破！ユニークもすでに800越え！

読んで下さりありがとうございます！

リアルが忙しくて書く暇が中々・・・

言い訳はここまでにしときます。

今回はデュエル回です。

第六話

「腹減った・・・」

（私たちは大丈夫ですね）

（ただ、口が寂しいな）

（ミーのサーカスではその日の観客動員数によって変わりマシタ）
（食べれないほどキツイことは無いッス）

現状把握しよう

・デュエルアカデミア到着

←

・探索してたら迷子になった

←

・万丈目さんこんにちわ

←

・「遅れたから晩飯抜きね」

←

・腹減って死にそう↑イマココ

おわかりだろうか

「あー、もう。なんか食べ物持ってくれば良かった!」

（こちらでは食事が出るからいらない、と言ったのはあなたではないですか）

（せめて、菓子ぐらい持ってこいよ）

（今更ですネ）

（ていうか携帯鳴ってるッスよ）

ふと見ると確かに携帯が鳴っていた。

「なになに・・・」

From: 万丈目

「やあ、身の程知らずのラーイエロー君。
君に授業のお知らせだ。」

今夜、0:00に君のベストカードを賭けたアンティデュエルをしようじゃないか。

このデュエルアカデミアのルールを知るにはちょうど良い授業料だろう？

ま、尻尾を巻いて逃げ出すのも悪い判断ではないがね。デュエリストとしてはそういう立場で良いのかは疑問だが。それじゃ、先程のデュエル場で待っているぞ。

フハハハハハハ！！！！」

「・・・」

（これは・・・）

（ククク、燃えてきたぜ）

（これは人を楽しくさせないデス。ミーは大っ嫌いデス）
（同意見ッス。でも・・・）

・・・かなり侮辱しているようだ。

だが、こんなあからさまな挑発、乗るわけがな・・・

「腹減ってイライラしてたんだよな」

（紳士の風上にも、いえ、男性として最低です）

（誰に向かって喧嘩売ったか教えてやるぜ！）

（ウフ、ウフフフ、ヨホホホホホホホ！）

（あゝ、みんな引つかかったちゃったッス）

・・・ん、ん、っ

失礼、目眩が・・・

とにかく、こういう腹いせは早めにやろうと5人組は

「一時間前に行って驚かそうぜ！」

となり、さっさと出て行った。

一時間前とか誰もいるわけがないのに、バカである

と、思っていたが・・・

~~~~デュエル場~~~~

「よく来たな！ラーイエロー！

一時間前とはなかなかどうして優秀じゃないか！

その点は褒めてやろう！」

・・・なんかもういた。

万丈目と取り巻き2人だ。

余談だが、彼らはカッコ良い演出を求め二時間前集合だったようだ。  
結局、ただ待ち構えることがかつこいと判断したらしい。

もうデュエルアカデミアは廃校寸前だ

「（おい、予定と違うぞ！？）」

（こんなはずでは・・・）

（んなこたあ、どうでも良い）  
（まずは、アイツ等をぶっ飛ばすのが先決デス）  
（もう、バカばかりッス）  
本当に救いようが無い。

「さて、予定よりだいぶ早いが始めてしまおうか。  
オレのデッキに早くも貢献してくれるみたいだしな！」  
「光栄に思えよ？もし使えるカードなら使ってもらえるんだから。  
中等部主席、未来のデュエルキングの万丈目さんになー！」  
「その方が札も喜ぶじやろうて」  
わはははは、と笑い合うブルー生徒。

「この野郎・・・！！」  
（我慢なりません！）  
（さっさとぶっ飛ばすぞ！）  
（クフ、フフフフフフ）  
（みんな安い挑発に乗りs・・・）

—— ブチッ ——

何かの切れる音がした。

「ヨホホホホホホホ！！！！！！！！！！」

イキナリ衛の顔が変わり、まるで、そう、

「な、なんだ貴様！？」

「さっきのライエローは何処行きやがった！？」

「面妖な……。何者ぞ！？名を名乗れ！！」

道化師<sup>ヒョロ</sup>のよつに

「ヨホホホ、初めましてミーはピエールという偽名を使うものデス。ユーの言う通り、職業としてピエロをやっております。

因みに衛サンは今のご就寝中デス。ミーの頭の中でネ。

・・・おお、ユーと言うをかけるミー、さすがデス」

（いや、寝てねーよ！）↑衛

（あれ、衛殿がこつちに！？）↑ロビン

（あの道化師、抜け駆けしやがって・・・）↑アイク

（ていうか誰かツッコむツス）↑張海燕

「・・・はっ、バカじゃねーの？どーせ瞬間メイクとかっていう自慢だろ？」

「落ち着くでござる。それもそれですごいでござるが。

相手を侮ってはいかんでござるよ。

誰が相手でも、手を抜かず、冷静に物事を見据え勝負することこそデュエルに必須の技術でござる。

万丈目殿の教えを忘れてはいかん。その通りでござるな？万丈目殿？」

「・・・ああ、その通りだ。デュエルは99パーセントりあえず、始めまショウ」人の言葉を遮るな！！」

言い争い（ブルー生徒が一方的に突っかかるだけ）が行われる。

（なんかグダグダだな）

（しかし、彼のデツキは・・・？）

(部屋からは持ち出してネエよな?)

(まもっちは毎日持ち歩いてるツスよ?いつオイラたちがやっても良いように)

そう、持ち歩いている・・・?

「それではやりましょうネ」

(あ、俺に指示くれればみんなデュエルできんじゃん。)

(なっ・・・)

(テメエ・・・)

(・・・盲点ツス)

「ちっ、もういい。いくぞ、ピエロ！」

この万丈目準が直々に引導をわたしてやる！」

「デュエル！」

「ミートのターン、ドロー」

初めてだからか、カードが上下逆だ

「カードを2枚伏せ、手札抹殺を発動」

《手札抹殺》

通常魔法(制限カード)

お互いの手札を全て捨て、それぞれ自分のデッキから捨てた枚数分のカードをドローする。

「チッ、手札を5枚捨て、その分ドローする」

「ミィは3枚捨ててドロー。  
・・・これはナカナカ。

精気を吸う骨の塔を守備表示で召喚デス。」

なんか出た。

（うわぁ）

（やはりカードを見てても思いましたが・・・）

（きめえ）

（想像以上ッス）

「なんだ、こいつは！？気持ち悪い！」

あやかしたくない  
「妖の類でござるな。面妖な・・・」

「お前たち、知らないのか？勉強不足だな。」

あのモンスターは単体では無意味な雑魚モンスターだ。

やはりライイエローはこの程度か。」

《精気を吸う骨の塔》

効果モンスター

星3 / 闇属性 / アンデット族 / 攻 400 / 守 1500

自分フィールド上にこのカード以外のアンデット族モンスターが存在する場合、

このカードを攻撃する事はできない。アンデット族モンスターが特殊召喚に成功する度に、

相手のデッキの上からカードを2枚墓地へ送る。

「ヨホホ、その通り。単体では弱いですヨ。そこで伏せていた魔法発動、テラ・フォーミング。」

そして、フィールド魔法、アンデットワールドを持ってきてそのまま発動デス。」

「ちっ、めんどくさいカードを・・・」

「ま、万丈目さん！なんなんですかあのカード！？」

「面妖な・・・。なんとも気色悪いよのう。」

「カードを読んで下サイ。」

（いや、読んでやれや）

（まあ、紳士的ではないですね）

（というか場に出したのに見れんのか？）

（デュエルディスクの形状ではムリッス）

では、地の文が説明しよう。

《アンデットワールド》

フィールド魔法

このカードがフィールド上に存在する限り、

フィールド上及び墓地に存在する全てのモンスターをアンデット族として扱う。

また、このカードがフィールド上に存在する限り

アンデット族以外のモンスターのアドバンス召喚をする事はできない。

「ではわかったところで、2枚目に伏せていた、このターン4枚目の魔法発動、生者の書・禁断の呪術-」

(ややこしっ)

(また、紛らわしい・・・)

(まわりくどいのが好きなんじゃないね?)

(なんか楽しそうッス)

### 《生者の書・禁断の呪術》

#### 通常魔法

自分の墓地に存在するアンデット族モンスター1体を特殊召喚し、相手の墓地に存在するモンスター1体をゲームから除外する。

「これにより、ユーの墓地モンスターを除外して、ミーの可愛いアンデットモンスターが復活します。ユーの墓地モンスター・・・よくわからないので適当に、ヘルソルジャー地獄戦士を除外して、コーリング・ノヴァを攻撃表示で特殊召喚ですネ」

### 《コーリング・ノヴァ》

#### 効果モンスター

星4 / 光属性 / 天使族 / 攻1400 / 守800

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、

自分のデッキから攻撃力1500以下の天使族・光属性モンスター1体を

自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

フィールド上に「天空の聖域」が表側表示で存在する場合、

代わりに「天空騎士パーシアス」1体を特殊召喚する事ができる。

ヘルソルジャー

### 《地獄戦士》

#### 効果モンスター

星4 / 闇属性 / 戦士族 / 攻1200 / 守1400

このカードが相手モンスターの攻撃によって破壊され墓地へ送られ

た時、

この戦闘によって自分が受けた戦闘ダメージを相手ライフにも与える。

「は？何やってんこいつ。コーリング・ノヴァは天使族・・・」

「貴殿はうつつか？フィールド魔法の効果を忘れておるわけではあるまいな？」

「ちっ（さっきの手札抹殺でリビングデッドの呼び声も墓地に落ちたし、地獄戦士に至っては除外まで・・・、踏んだり蹴ったりだな）」

《リビングデッドの呼び声》

永続罠（制限カード）

自分の墓地からモンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。

そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

「そして、精気を吸う骨の塔の効果発動デス。ユ一のデッキの上から2枚を墓地に送りマス」

（いつみてもえげつないなあ）

（ピエロのデッキは私には使いにくいです）

（てめーのデッキの方がめんどくせえよ）

（みんな集中って言葉知ってるっスか？）

「この、卑怯者！！正々堂々かってこい！！」

「うるたえるでない！墓地に送られたのは手札を合わせてもいまだたったの7枚ぞ！」

「そうだ、このような雑魚モンスターしか使わない道化なんかは俺様が負けるわけないだろ？」

大した自信だ。

まるで、どこぞの金ぴか王みたいな感じだ。

「マダいきますヨ。墓地のモンスター効果発動！

めずき馬頭鬼の効果で墓地のモンスター、巨大ネズミを攻撃表示で特殊召喚！

まあ、代わりに馬頭鬼が除外されますがネ。

そしてもちろん精気を吸う骨の塔の効果発動デス。

さらに2枚墓地へ送りマス」

### 《馬頭鬼》

効果モンスター

星4 / 地属性 / アンデット族 / 攻1700 / 守800

墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、自分の墓地からアンデット族モンスター1体を特殊召喚する。

### 《巨大ネズミ》

効果モンスター

星4 / 地属性 / 獣族 / 攻1400 / 守1450

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから攻撃力1500以下の

地属性モンスター1体を自分フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

「くそ、やっぱり！あいつのデッキは！！！」

「アンデット不死者どもを利用した山札破壊系……！！！」

「しかもいわゆるリクルーターを利用した種族変更型……。

ふん、まともに戦えない雑魚の使いそうなデッキだ。」

(・・・)

（どうしました、衛殿？）

（大方、『リクルーター』の意味がわからなかったんだろ）

（オイラ達よりは長くやってるツスからね。

教えてないのに使いこなすピエロに負けて悔しいんすよ。多分）

ちなみに、リクルーターとは、様々なタイプがあるが、ここでは

「戦闘破壊され、墓地に送られるとデッキから条件にあったモンスターを特殊召喚できるモンスター」

を指し示している。

調べるのが一番手っ取り早いだろう。

「ミーはカードを一枚伏せてターンエンド」

フィールド

ピエール：ライフ4000

手札：2枚

モンスター：精気を吸う骨の塔（守備力1500） コーリング・

ノヴァ（攻撃力1400） 巨大ネズミ（攻撃力1400）

魔法罫：アンデットワールド 伏せ一枚

万丈目準：ライフ4000

手札：5枚 残りデッキ枚数：26枚

モンスター：無し

魔法罫：無し

「フン、俺様のターン、ドロー！」

勢いよくドローする万丈目、作戦はもちろん

「デッキ切れ前に攻めきる！！！！俺様は強欲の壺を発動！デッキか

ら2枚ドロー！」

「ここでドローカード……さすが万丈目さんだ……！」

「これで押し切れれば良いのじゃが……。万丈目殿！どんな雑魚でも十分気を付けなされよ……！」

「もちろんだ！ここまでデュエルをコケにされて黙ってられるか！」

いや、別に汚してるわけではないと思うのだが……。そんなことを衛は思いながら相手の行動を見やった。

「俺様は死者蘇生を発動！甦れ、<sup>ヘルジェネラル</sup>地獄將軍・メフィスト……！」

《地獄將軍・メフィスト》

効果モンスター

星5 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻1800 / 守1700

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、

その守備力を攻撃力が越えていれば、その数値だけ相手に戦闘ダメージを与える。相手に戦闘ダメージを与えた時、相手の手札からカードを1枚ランダムに捨てる。

（そんなものいつ……？）

（まさか、最初の手札抹殺で……！）

（ほお、墓地つてのも中々使えるもんだな。道化師もやってたが大したもんだ）

（いや、のん気に言ってる場合じゃないッス）

「もちろん、そのモンスターも今はアンデットなので、デッキから墓地にカードを送ってくださいヨ」

「わかっている……！」

万丈目

残りデッキ枚数 26 ↓ 25 ↓ 23 ↓ 21

「このままバトルフェイズに入る！！メフィストで精気を吸う骨の塔をこうg・・・、ちっ忘れてた。」

巨大ネズミに攻撃！！」

「万丈目さん、なぜ！？あのカードは確実に相手のキーカードのはずなのに！」

「攻撃できないのじゃよ。あやつ、あのモンスター自身の効果とフイールドの効果をうまく使っておる」

「それでハ、畏発動、スピリットバリア」

《スピリットバリア》

永続罠

自分フィールド上にモンスターが存在する限り、このカードのコントローラーへの戦闘ダメージは0になる。

「畜生！これじゃダメージを与えられない！！」

「ジリ貧、というところでございますな。万丈目殿はこの危機をどう乗り越えなさるのか」

「うるさい、黙っている！気が散る！！」

地獄將軍・メフィスト VS 巨大ネズミ

攻撃力1800

攻撃力1400

「巨大ネズミの効果発動、巨大ネズミを攻撃表示で特殊召喚、そして精気を吸う骨の塔でデッキから2枚を墓地へ送って下サイ」

万丈目

残りデッキ枚数 21 ↓ 19

「ちっ、リボーン・ゾンビを守備表示で召喚、カードを一枚伏せてターンエンドだ。」

（しまった、遊戯十代を警戒しすぎてこいつへの対策をぬかったか・・・！！）

伏せカードはブラフのヘル・ポリマー・・・、厳しいな・・・。ただのラィエローと侮っていた・・・。しかも、以前とデッキが違う！

まあ、人も違うみたいだが・・・。なんなんだ、奴は？」

《リボーン・ゾンビ》

効果モンスター

星4 / 闇属性 / アンデット族 / 攻1000 / 守1600

自分の手札が0枚の場合、

フィールド上に攻撃表示で存在するこのカードは戦闘では破壊されない。

《ヘル・ポリマー》

通常罠

相手が融合モンスターを融合召喚した時に発動する事ができる。自分フィールド上のモンスター1体を生け贄に捧げる事で、その融合モンスター1体のコントロールを得る。

フィールド

ピエール：ライフ4000

手札：2枚

モンスター：精気を吸う骨の塔（守備力1500） コーリング・ノヴァ（攻撃力1400） 巨大ネズミ（攻撃力1400）

魔法罠：アンデットワールド スピリットバリア

万丈目準：ライフ4000

手札：3枚 残りデッキ枚数：19枚

モンスター：地獄將軍・メフィスト（攻撃力1800） リボーン・ゾンビ（守備力1600）

魔法罫：伏せ一枚（ヘルポリマー）

「ミীরターン、ドロー、バトルフェイズに入ります。巨大ネズミでメフィストに攻撃です」

ここから作業なので短縮。後ろの数字はこのターン特殊召喚した数。  
・巨大ネズミ×1 共鳴虫×2 ドラゴンフライ×3 軍隊竜×3  
・コーリング・ノヴァ×2 シャインエンジェル×2 ユーフォロイド×2 UFOタートル×3 仮面竜×3 軍隊竜×0（軍隊竜はもうすでに使用済み）

ハウリング・インセクト

### 《共鳴虫》

効果モンスター

星3 / 地属性 / 昆虫族 / 攻1200 / 守1300

このカードが戦闘によって破壊され墓地に送られた時、

デッキから攻撃力1500以下の昆虫族モンスター1体を

自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

その後デッキをシャッフルする。

### 《ドラゴンフライ》

効果モンスター

星4 / 風属性 / 昆虫族 / 攻1400 / 守900

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、

自分のデッキから攻撃力1500以下の風属性モンスター1体を

自分フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

アーミー・ドラゴン

### 《軍隊竜》

効果モンスター

星2 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻 700 / 守 800

このカードが戦闘で破壊され墓地に送られた場合、

「軍隊竜」をデッキから1枚選択し自分フィールド上に特殊召喚する。

その後デッキをシャッフルする。

### 《シャインエンジェル》

効果モンスター

星4 / 光属性 / 天使族 / 攻 1400 / 守 800

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから攻撃力1500以下の

光属性モンスター1体を自分フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

### 《ユーフォロイド》

効果モンスター

星6 / 光属性 / 機械族 / 攻 1200 / 守 1200

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、

デッキから攻撃力1500以下の機械族モンスター1体を表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

その後デッキをシャッフルする。

### 《UFOタートル》

効果モンスター

星4 / 炎属性 / 機械族 / 攻 1400 / 守 1200

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、

自分のデッキから攻撃力1500以下の炎属性モンスター1体を自分フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

《仮面竜》

効果モンスター

星3 / 炎属性 / ドラゴン族 / 攻1400 / 守1100

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、

自分のデッキから攻撃力1500以下のドラゴン族モンスター1体を  
自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

(え〜と、こういうのは・・・)

(自滅しに行っているようですが・・・)

(自分より強え奴に攻撃して自らの効果でモンスターをデッキから・  
・・・)

(大量特殊召喚!! ダメージは罨で守り、骨の塔で相手デッキにダメージを与えるツスね!!)

もう相手のデッキは0枚ツス!!)

「では、ターンエン」あ~~~~!! もう始まつてる!!」「アニ  
キ〜、待つてよお〜!!」・・・ターンエンド。ユーのターンで  
すが、今になつてできることはありませんか?」  
エンドフェイス

「・・・無い。こちらのターン、デッキにカードがないため、ドロ  
ーすることができない。」

「万丈目さん・・・」

「対策してなかった時点で確定しておつたしの。」

「そもそも相手のデッキも違う故、敗北は必須とも言えるじゃろう」

「え~~~~、もう終わったのかよ! ? くあ~~~~、残念だなあ」

「ホントにアニキはデュエル好きだね。見るのもやるのも」

「それでは、疲れたので、この辺デ。あでゅー。」

そのまま黙って俯くピエール、そして

「・・・ぶはあ、やっと戻れた」

（どうやったら出れるのか教えなさい！）

（さっさと吐けや、オイ）

（おっ、心のドアが開きマシタ。これで皆さんの顔も見に行けます。）

（全く人の話を聞いてないツス！！そしてその言い方なんか嫌ツス！！）

「ようやく戻ったか」

「なんなんだこいつは・・・」

「面妖だのう・・・」

すこし落ち着きを取り戻した万丈目一味

「何があつたんだろうね、アニキ？」

「そんなの後で聞けばいいだろ！？それよりデュエルだ！！」

訳が分からないけれどポジティブな十代と疑問が解決できずに不満な顔の・・・翔

「今、名前を忘れられた気がするツス」

「何言ってるんだ？翔」

まったく心外である。作者<sup>神（笑）</sup>が忘れるわけが・・・

えへんっ。失礼、本日は音波の調子が悪いのでここまでで。

「よし、行くぞ万丈目！」

「万丈目さん、だ！」

「デュエル（次回、こうご期待！）」

~~~~~

「まったく、どういふことだ！誰なんだよアイツ！！」

あんなやつ、原作にはいなかった！！

・・・はっ、もしかボクがここに来てしまったせいでオリキャラも誕生してしまった！？

・・・おもしろい、その変化を楽しもう！

この理想の姿を手に入れ、この時代には無いカードで彼を倒してみよう！

そうすればはつきりする！なんせここはデュエルアカデミア、すべてがデュエルで決まる神聖な島！

確かめてあげるよ、このボク、菊地 真がね！！

よし、決まった！！ボク超カッコイイ！！やっぱり来る前の名前言わなくて正解！！これでボクも主人公だ！！」

ここにもバカがいた。現実が厳しいことを知らないのだろう、しかし誰だこいつ？

あ、それではまた次の話で、ツアイチエン再見

第六話（後書き）

また懲りずに新キャラを・・・

というわけで今回はアンデットデスキデスでした。

予想外だったでしょうか？

現在は独自のオリカを7月入ってからまた思いつきまして、考案中です。

いつになったらお見せできるのか。

こんな亀更新な小説と呼ぶのもおこがましいつたない文章をよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7748s/>

多重人格者の苦悩

2011年10月8日21時36分発行